

久米賞 小説部門 正賞 受賞作品

トロンプ＝ルイユ



郡山ザベリオ学園中学校

川崎 緑也

えつ？

紫色のバッグ、紫色のヒール、紫色のストッキング、紫色のワンピース、紫色の帽子、紫色のマスカラ、そして紫色のネイル。

高校生？…いや、違うな。

二十歳ぐらいのおねえさんかな。

でも、ママ（おそらくそうであろうと思われる付き添いの女性）の手をずっと握ってる。

大人がそんなことする？

時折、うめき声ともしゃつくりともつかない小さく短い声を発している。そのたびママの手は、おねえさんの手を握り返す。

「高橋さん。」

受付の静かな声がおねえさんを呼んだ。おねえさん親子は寄り添いながら診察室に入つていった。

息が詰まるような、母親と二人きりの時間が流れた。おねえさんは違う、私の手が握っているのは母親の手ではなく、画面にひびの入ったスマホ。私はいとおしむように両手でその傷ついたスマホを握りしめていた。

診察室のドアが開くと、おねえさんがママにもたれかかりながら出てきた。眼の焦点は明らかに虚空の一点に収束し、足元は歩き方を忘れてしまったかのように右足と左足が交互に床に円を描いていた。ワンピースから伸びたその四肢はとうてい彼女の意志通りに動かすことなどできはしないのではと思われるほどやせこけていた。

突然、静寂を破る音が待合室に響いた。

床に円を描く紫のコンパスを見つめていた私の眼はその瞬間、左斜め上の音の発生源を捉えた。

紫の爪で彩られたおねえさんの手が、ママの背中に力なく、けれども確かなダメージを残しているであろうことは容易に想像できるしなやかさをもって振り下ろされている。泣きながら、何度も、何度も。ママも泣いている。二人とも声を立てずに泣いている。泣きながら待合室のドアから消えていった。

「一ノ瀬さん。」

私を呼び出す受付のコールが響いた。

隣の薬局で薬を処方してもらい、母親の車に乗つた。

「よかつたわね。なんともなくて。お薬も出だし。飲み切ればきっとよくなるわよ。」

なんて能天気な母親なんだろう。

「なんともない」患者に薬が処方されるわけないじゃない。第一、血液検査もレントゲンも撮らず、体重さえ聞かずに問診だけで処方される薬なんて怪しくって飲めたもんじやないって、なぜ思わないのだろうか。

「でも、本当に安心したわ。これで受験には間に合いそうだものね。」

「安心」？

何が安心なのだろう。「安心」って、逆の言葉は何なのだろう。後部座席でググつてみた。「安心 対義語」：検索」と。出た！そつか、「不安」とか「心配」か。不安も心配も取り除かれた

から、受験に邁進しなさいってことね。

「私の母親は受験をしたことがないのだろうか。中三の頃の不安とか心配つていったら、真っ先に受験なんじやないの？」「もう、スマホばかり見て。帰つたら勉強するのよ。病気じやないんだから。」

「病気じやない」？

夜も眠れなくて、朝も起きられない。食欲だつてないし、血色も悪い。学校だつていっぱい休んでるし、たまに行つたかと思えばめまいがする。下痢と便秘を繰り返してゐるし、生理だつてどつかへ行つちやつたみたいだし。定期的にやつてくるのは変な頭痛と妙な落ち込みと意味のないハイテンション。いつたい、私のどこが「病気じやない」の。あの医者、ポンコツにもほどがある。どう少なく見積もつたつてこのくらいの症状は持つてるんだ。「起立性調節障害ですね」くらい言つてくれてもよさそうなものだ。処方した薬だつて、せいぜい睡眠導入剤と整腸剤くらいなものに違ひない。とにかく、私はれつきとした「病気」なんだ。

もうすぐ十五回目の誕生日の私と、紫のおねえさん以外は、世の中のすべてが穏やかな夏の初めだった。

「おう、一ノ瀬。生きてたか。相変わらず顔色悪いな、お前は。放課後、一緒に走ろうぜ。体力つくぜ。体力がなきや、世界征服をもくろむコスゲルゲの組織と戦うこともできないからな。オレ一人じや勝てる自信もねえしな。一ノ瀬も参戦してくれたなら心強いつてもんだろ。」

最後の中体連は二回戦で終わつたはずなのに、まだ部活してんの、夢野は。早めにかかつた中二病が、まだ完治してないんだね。だいたい、数学の小菅先生は地球征服をもくろんでいるわけではなく、夢野の偏差値向上を最大使命としているだけだし。困つたもんだね、中二病も。じゃ、夢野も「病気」ってことか。いやいや、中二病は

病気じやない。ま、中二病罹患者でもいいやつはいいやつなんだよ、夢野は。自信を持ちな。きっと君一人でも地球征服は阻止できる。「緑ちゃん、おはよう。今日は大丈夫なの。久しぶりだね。最近、休み続いたもんね。私も、来たり来れなかつたりだけど、授業に出られてた分は、後でノート貸したげるね。」

「あ、凛ちゃん。ありがとう。今日はちょっと体調がいいんだ。」

凛ちゃんはいつだつていい子。いつもニコニコしてゐるし、必ず声をかけてくれる。何より、かゆい所に手が届く絶妙のフォローが心地いいを通り越して神の領域にまで届いてゐる気さえしてしまう。だいたい、透き通るように白い肌はこの世の何よりも美しいとさえ思える。日焼け対策も完璧で、いつも長袖のブラウスを楚々と着こなしている。同じ中三なのに、落ち着きとか立ち居振る舞いとか、私なんかとは全然違う。中学校に入つて初めて出会つた隣の小学校の子だけど、なんか、ずっと友だちだつたみたいな感じでいつも気にかけてくれてゐる。

そういえば、夢野んちとか凛ちゃんちのお母さんつて、どんな人なんだろう。きっと、子どものことを一番に考えてくれる人なんだろうな。物事を落ち着いて考えてて。私の母親とは大ちがいなんだと思う、きつと。

教室に入ると、うるさく走り回る男子たちと、いくつかの小さなグループで固まつて小声で話してゐる女子たちの光景が飛び込んできた。少しちゃんとくさい氣もするが、日常といえば、ザ・日常のありふれた中学校の教室界隈だ。

「三者面談の日程が決まつたので、メールで送つておきました。おうちの方と必ず確認してくださいね。ねえ、夢野君。先生がお話をしているときはきちんと体をこちらへ向けなさい。」

また不毛なやり取りが始まつた。中二病の夢野がまともに先生の話なんて聞くわけがないし、しまいにはキレてふてくされるのがオチだ。夢野はそのたびに職員室に呼び出されて、もしかしたら学校

で一番の職員室の常連さんかもしれない。英語担当の山口先生がこのクラスの担任になつてから一年半近く。そろそろお互いのクセを理解し受け入れる度量を身につけてもよさそうなのだが、二人ともなかなかのお子ちやまで、最近は少しため息が出てしまう。私もどちらかといえど山口先生は苦手だ。決して教え方が下手とか、怖いとか冷たいとかいうのではないんだけれど、しいて言えば「しつこい」。私の休みが続くと、必ず決まった時刻に家に電話がかかってくる。それも、始業前、つまり私の家では母親が出勤するためには出なければならない時刻に一連の「儀式」が展開される。

「ううん、なんでもない。大丈夫、心配ないから。」
そういうと、凛ちゃんは小走りに図書室を出ていった
面談が終わり、母親は、

「ああ、よかつた。何も心配ないって。ねえ、緑。あとは欠席日数が増えないように気を付けてって、山口先生おっしゃってたわね。」と、運転席にすわり、まつすぐ前のフロントガラスに向かって一人で話していた。

「心配ない」^ヒ 「安心」^{アシキ} ?
デジヤブのようだった。…ため息が出た。

私は、凛ちゃんに連絡を取ろうと思い、ケータイのロックを外した。そうして気づいた。凛ちゃんはケータイを持たされてなかつた。その日から私も体調を崩してしまい、結局登校できたのは、一週間後の火曜日だつた。その日、凛ちゃんは学校に来なかつた。教育相談の翌日からずつと学校には来ていないという。

「はい、今、代わります。ほら、緑、山口先生よ。」
とくる。悪い人でないのはわかるが、心底私を心配して電話をかけてきているようには思えない。決まつた台詞を一字一句たがわぬよう丁寧に唱えて滞りなく遂行される、まさに儀式だ。山口先生のこの、土足で他人の家に上がり込んでくる感じが苦手だという友だちは、私だけではないようだ。

三者面談が始まって三日目。私は、凛ちゃんのコマが終わるまでの恐ろしく長く感じる時間を母親と一緒に図書室で過ごしていた。面談が終了したら、そのコマの生徒が次のコマの親子を呼びに来るシステムになっていた。

「ごめん、緑ちゃん。少し遅くしちやつたね。おばさん、次ですので、どうぞ教室にいらしてください。」

「凛ちゃん、どうしたの。なんかあつた。」

私も母親と同じになるところだつた。たいしたことない状態の人間は一週間以上も学校を休んだりはしない。何かあつたんだ。「先生、凛ちゃんのおうち教えてください。」

ないのよ。」

それはそうだ。教師が友だちの家など簡単に教えるようであれば、今どき大問題だ。納得して、次の手を考えながら歩いていると、うしろから、ドップラー効果でも巻き起こしそうな勢いで大きな声が迫ってきた。

「よかつた、一ノ瀬。お前、登校してたのか。あのな、実はな、華実^{はなぎね}がな。」

「凛ちやんが？」

「華実がずっと休んでてな。んで、うちの母ちゃんが職場でうわさを聞いてきてな。」

夢野のお母さんの職場に、凛ちゃんのお母さんの元同僚がいて、その人からの話らしかった。華実ってさ、小学校はおれらとちがつてたじやん。でも中学の学区が同じだから、今の中学校で一緒になつたつてわけでしょ。だから、おれたち、実は本当に浅くしか華実のことを知らないわけだ。」「そう。凛ちゃんは東小。私たちは西小。」「で、小三の時、東小に転校してきたんだけど、前とは名字が違つてたんだつて。」「えつ。」

「そう。なんでも、お父さんとお母さんが離婚して、華実はお母さんと一緒に今のところに引っ越してきたんだつてさ。」「まあ、あるあるつちやあ、あるあるよね。」「ここまでではな。」

「華実のおふくろ、昼も夜も働かなくちやいけない状況になつて、子どもんときから華実、おふくろが用意していつたご飯をあつためて一人で夕飯食つてたんだつて。」

「じゃあ、いつも一人でずっとお留守番してたつてこと。小学校三年生が。」「うん。ほんで、高学年の頃には学校、休みがちになつてな。たまに

学校に行つても、ほら二組のちよつとのことで大騒ぎしてすぐはやし立てる東小から来た杉野。あいつらにくせえとかきたねえとか言われていじめられてたみたいなんよ。」

「ああ、杉野ね。らしいわ。」

「んで、華実、なかなか学校に足が向かなくなつちやつたみたいでさ。」

「わかる。凛ちゃん、頑張つてたんだね。つらかつたろうにね。でも、中学になつたら、凛ちゃん元気で登校してたじやない。休みがちな私にもともとやさしくしてくれてたし、ノートなんかも見せてくれてたし。頼りになる存在だよ。」

「オレもそう思つてたよ。でも、華実のお母さん、去年あたりから、彼氏ができたみたいで、ちよくちよく家に来ては、華実が暗いとか言つて、邪険にしてるみたいなんだ。」

そりや、凛ちゃんのお母さんだつて大人なんだし、お付き合いしてる人の一人や二人いたつて、私はいいと思う。でも、その人が、凛ちゃんに対してとやかく言うのは間違つてる。ましてや、表情が暗いとか、笑わないとかつていうのは、凛ちゃんの問題ではなく、それを受け止める側の人間の主観だ。「それつてあなたの感想ですね。」つて感じだ。よけいなお世話だ。いつたい何者なんだ。なんの権利があつて凛ちゃんの心をかき乱すんだ。

しかし、凛ちゃんに対してなし得るわずかな方策をもちあわせていなかつた私は、彼女に対して無関心で醜悪な周囲と同じ顔で彼女の目には映つていたに違ひなく、自分自身を非難し、責めることしかできなかつた。

結局、凛ちゃんの顔を見ないまま夏休みを迎えることになつてしまつた。私も休んだり登校してみたりといつた安定しない日々を過ごしていたので、凛ちゃんがいつ登校していたかはわからなかつたが、夢野の話では、あれからずっと学校には来ていなかつたという

ことだつた。

夏休みも半分が過ぎた八月の狂おしい暑さの昼下がり。ミンミンゼミの声と同じくらいのけたたましさで、夢野の声がうちの玄関先で鳴り響いた。

「一ノ瀬、一ノ瀬え。華実が、華実が学校に来てるぞ。」「えつ。凛ちゃんが。」

夏休みというのに、受験勉強もせずに暇を持て余した夢野は、もうとつぶくに引退したはずの部活へ顔を出し、煙たがられていることにも気づかず、先輩面を十二分に發揮していたらしい。水分補給の休憩の時、学校の廊下を山口先生の後について歩く凛ちゃんを見かけて、この炎天下、自転車を漕いで急いで知らせに来てくれたのだ。

「あつ、緑ちゃん。」

昇降口の下足箱の前で待っていた私を先に見つけたのは、大きめのバッグを持って少しやせ透明感を増した凛ちゃんだった。
「凛ちゃん。どうしてたの。体の具合でも悪かったの。心配してたんだよ。だつて、三者面談の時、凛ちゃん、泣いてたよね。」「緑ちゃん。」

そう一言だけ発すると、凛ちゃんは、私の肩に顔をうずめて泣きじゃくつた。生暖かい涙がTシャツにしみ込んだ。夢野の知らせで、部屋着のまま飛び出して走ってきた私は、彼女の涙をぬぐつてあげるハンカチさえ持つていなかつた。
「夢野、ぼうつとしてないで、凛ちゃんのバッグ、持つたげて。」「あ、えつ。う、うん。」「凛ちゃん、いつたん、うちへ行こ。」

Tシャツに短パンの私は、相変わらず長袖の薄手のブラウスにスカートとかわいらしいサンダルをはいた凛ちゃんの肩を抱きながら家へ向かつて歩いた。傍らを少し拳動不審気味に、凛ちゃんのバッゲを乗せた自転車を押して歩く夢野の姿も併せて、客観的に見ると

実に奇妙な三人の姿がそこにあつた。

「さあ、入つて。」

「でも、急におじやまして：」

「綠い、どこ行つてたの。まつたく。お昼ご飯も半端にして出でつちやつて。お母さん、お夕飯の買い出しに行かなくちやいけなかつたのに。あれ、お醤油つてあつたつけ。ま、いいか、二、三日は間に

合うか。重いものね、お醤油は。」

だれも聞いていないにもかかわらず、自分勝手に質問を発し、自分一人でどんどん話を進め、正解を得てしまふ能天気な母親が私たちを出迎えた。

「あら、華実さん、夢野君。暑いわね。変わりない？」

どう見たつて「変わり」はある。色白の泣きじやくる少女と、大きなバッグを抱えた中二病男子、そして部屋着のまま外から帰ってきた自分の娘。どう見たつて尋常じやない。

「いいから、あつち、行つてて。」

三人で私の部屋に入ると、しばらく沈黙の時間が流れた。正直、私もどう話を切り出してよいのやらわからなかつた。凛ちゃんの様子は、それほど突き詰めた様子だつた。結局、沈黙を破つたのは、やはり能天氣で無遠慮な私の母親だつた。

「暑いわね、今日は、特に。ね、ほら、麦茶でも飲んで。そう、熱中症も怖いからね。おばさん、気を利かせて、スイカ、塩振つておいたからさ。華実さんは、真っ白いブラウス、汚さないようにね。スイカの汁がつくと…」

「いいから！向こう行つてて。じやま！」

自分でも驚くくらいにつづけんどんな言い方だつた。夢野が気をつかつて、

「一ノ瀬、おかあさん、せつかく持つてきて下さったんだから。」「いいのよ、夢野君、いつもこうなんだから。緑は今、絶賛反抗期発動中なのよ。」

があつと顔が赤くなるのがわかつた。友だちの前で、それも、私

より大人びて反抗期なんて完璧に乗り越えてる凛ちゃんとか、私も
いつもずっと幼い中二病の夢野とかの前で正面切って「反抗期」と言
われたことがたまらなく恥ずかしかった。それまで自分が反抗期だ
なんて指摘されたこともなかつたから、自覚のなかつたところで間
接的に指摘され、反論もしたいがその根拠も持ち合わせていないの

がほてりを増幅させている。落ち着け、私が
「うるさいってば！」

「じゃ、二人とも、ごゆっくりね。」

場違いの明るさと微笑みをたたえて、私の母親は部屋のドアを閉
めた。

凛ちゃんの目にまた涙が光つた。さつきよりも大粒の涙がこぼれ
た。いや、流れたといつたほうが適切だつた。そして、小さな子ども
もが転んですりむいた時と同じような大きな声で、ベッドの端に腰
掛ける私のひざの上に顔を乗せて泣きじやくつた。私はどうするこ
ともできなかつた。子どもだつた。こんなときに友だちにかけるい
くつかの言葉を持ち合わせていてるのが大人なんだと思つた。そして、
私はその一つも持ち合わせてはいなかつた。

『…子どもだ。』

隣で、夢野もそう思つていたに違ひない。

三者面談の日、凛ちゃんは、山口先生から進学希望の高校を尋ね
られた。凛ちゃんが答える前に、凛ちゃんのお母さんが、

「先生。凛は、進学はしないんです。なるべく早く就職したいつて言つ
てるんです。」

と答えたという。

それは、凛ちゃんにとつて寝耳に水だつた。進学のことをお母さん
と話したことなど、それまで一度もなかつたといつうし、普通に高
校に進学するものだと思つていたといつう。

「小学校の高学年どころから、不登校になっちゃつて。そんな子、進

学を希望しても無理なんですよ、進学なんて。」

「いえ、お母さま。それは小学生の時で、中学校に入つてからは、そ
れほど多くはありませんし。」

「いいえ。無理に決まつてます。さぼり癖のついた子なんて、どこの
高校だつて取つてくれるはずがありませんもの。」

「お母さん…」

三者面談から帰つて、凛ちゃんは、もう一度お母さんと話をした
そうだ。進学して、将来は幼稚園の先生をしてみたいと。

私は、凛ちゃんにぴつたりの職業だと思った。かわいらしいエプロン姿で、ぐずつている子どもをやさしく抱いている凛ちゃんの姿
が目に浮かんだ。

その話の場には、お母さんのお付き合いしている男の人もいたそ
うだ。その人は定職に就いてはいないうで、凛ちゃんは、お母さん
がその人に茶封筒を渡している姿を何度も見かけたことがあつた
という。その男の人は、

「いいか、早く稼いで親に金を入れるのが一番の親孝行なんだ。お前
が小さい時から女手一つで育てた母親に迷惑をかけるのはどうなん
だろうな。もう、中学校も終わつて一人前なんだから、そろそろ親
孝行しなくちゃいけないんじやないのか。俺の知り合いに四国で旅
館をやつてるやつがいて、そいつが住み込みで働かせてやるつて言つ
てるから、そこに行くといい。」

と凛ちゃんに言つたそうだ。

「それで、凛ちゃんのお母さんは？」

「ううん。何とも言つてはくれなかつた。」

「それで、凛ちゃんは？」

「私は、私は、高校に行きたい。でも、お母さんは、ずっと私のため
に昼も夜も働いて、それなのに私は、学校を休むことが多くて。あ
の人の言う通りかもしれない。それに幼稚園の先生になるためには、
高校を出た後も、大学や専門学校に通わなきやいけないし。早く就

職してお母さんにお金を入れるのが一番じゃないかって。これ以上迷惑はかけられないもの。」

理不尽だと思った。凛ちゃんのお母さんの付き合つてる男の人がお金を欲しがつてゐるに違ひない。凛ちゃんにそのお金を稼がせようとしているんだ。

「私、今日、退院して、まっすぐ学校に行つたんだ。お母さんに言われて。暑さで体調を崩したつていうことにしておきなさいつて言われて。病院まで迎えに来てもらつて学校の前で降ろされた。今夜は用事があるから、一人で家に帰つてなさいつて。」

「退院つて、入院してたの？」

「うん。」

「なんで？いつから？」

「うん。三週間くらい前かな。緑ちゃん、知つてるかな。オーバードーズとかつて。」

聞いたことはある。「クスリ」だよね。トーエ横とか、都会の子たちの、それも高校生とか、無職少年とかの話だと思つてた。こんな田舎の中学生の、それも、凛ちゃんみたいなおとなしくつてまじめな子がと考へると、少しギヤップが大きすぎて、丸ごと理解するには時間がかかりそうだつた。反応が遅れた。

「何も知らねえんだな、一ノ瀬は。」

夢野が割つて入つた。

「普通の市販の薬とかを大量に飲むと、変になつちやつたり死んじやつたりするやばいやつだよな。」

「えつ、じやあ、自殺、しようとしたの。」

「ううん。別に積極的に死にたいつて思つたわけじゃない。前から『死

んじやつたら、何も考へなくていいから、楽かも』とかつては思つことはあつたけど。」

言葉が出てこなかつた。何か言つてあげなくちゃとは思うんだけど、口の中で言葉を組み立てることができなくなつていた。自分の

身近な友だちで、そんなに悩んでる子がいたなんて。私にできたことはなかつたのかつて。」

「あつ、でも大丈夫だよ。本気で死のうとかは思つてないから。ただ、楽なんだ。薬飲んだりとかすると。一瞬でも楽になる。」

「凛ちゃん。」

「ありがとう。なんか、いっぱい泣いてすつきりした。緑ちゃんと夢野君に聞いてもらつて、なんか軽くなつた。」

緑ちゃんはそう言うと、一人で家に戻つていつた。だれも待つてはいなゐ家に。そして、一人きりで夕飯を食べるのだろう。

「華実さん、夢野君。おばさんのから揚げ食べてつて。つて、あれ。華実さんは？」

何も知らない母親が素つ頓狂な声で部屋に入つてきた。凛ちゃんは帰つちゃたよ。

「ダメだよ。」と言わなければならなかつたのかもしれない。そんな危険なことはすぐにでも「やめなよ。」と言つてあげなければならなかつたかもしれない。でも、私は、止めることは緑ちゃんを否定することにつながると思つたのだ。理由はわからないが、否定することになつてしまふと思つてしまつたのだ。

二学期が始まり、凛ちゃんはいつもの凛ちゃんに戻つてニコニコ笑みを浮かべて私を迎えてくれた。

「おはよう、緑ちゃん。」

「あつ、凛ちゃん。お、おはよう。」

「あのさ、緑ちゃん。私、緑ちゃんに叱られたり、嫌われたりすると思つてたんだ。」

「どうして？」

「だつて、あんなばかなことやつて、入院までして。友だちに心配かけて。でも、ありがとう。」

「かまわないと私は言つた。凛ちゃんはかすかにほほ笑んだ。（よう

に思いたかった。)

いつも通りの時間が過ぎ、私たちは、学校を休んだり、登校した
りをお互いに繰り返していた。何ら変わりばえのしない日常だった。

卒業式の朝、凛ちゃんは登校してなかつた。いつもと言えばいつ
もの風景だつた。

でも、凛ちゃん。中学校最後の日だよ。一緒に写真も撮りたかつ
たのに。さびしいよ。

最後の朝の会の時に、山口先生が話した。

「みなさんにお知らせがあります。華実さんが昨日引っ越しました。
本当は卒業式には出席するわけだつたのですが…。急に決まつたそ
うです。みんなには内緒にといふので、今日のお知らせになつてし
まいました。」

私は、なんとかかんとか高校に合格した。夢野も大好きな部活が
できる高校に無事進学した。母親は、
「緑なら大丈夫つて、私ははずつと思つてた。」

高校の入学式の翌日、山口先生から母親のケータイに電話が入つ
た。いつも通り、少し話をした後、私に渡された。お祝いでも言わ
れるのかとも思つて電話を代わつた。

「一ノ瀬さん。あのね、華実さんがね…」

山口先生の声が遠のいていった。朽ち果てた遺跡のように立ちつ
くした。

透き通るような肌の少女の長そでのブラウスには理由があつたの
だ。單なる日焼け対策などではなかつた。彼女が負つた傷を覆い、
彼女自身が彼女を傷つけることから守る装甲でもあつたのだ。

…うかつだつた。気づいてやれなかつた。凛ちゃんの明るさとや
さしさがただ心地よかつた。大変なのは私だけといつもいつも思つ

てた。私は結局、自分だけだつた。もつともつと氣を張るべきだつた。
凛ちゃんは、あの時、確かに「オーバードーズとか」つて言つてい
た。「とか」に気づくべきだつた。しかし、気づいたところで、私は
凛ちゃんを止めていただろうか。：わからない。凛ちゃんが私だつ
たら、決して止めたりはしなかつたと思う。だつて、一瞬でもそれ
で私が樂になることを彼女は知つていたから。

私と凛ちゃんは何が違うのだろう。妙に冷静になつてくる頭の中
で、私は凛ちゃんとの差異を検証し始めた。何でもいい、作業に没
頭すれば、現実から離れることができる。

突然、

「から揚げ、食べさせたかつたな。」

と、母親がつぶやいた。こんな時にまだ。無遠慮に必死の作業を
遮断する、場を考えないのんきさには怒りさえこみ上げそうになつ
た。ふと、その時気づいた。

そうか。母親なんだ。凛ちゃんと私では、母親の在り方が違うんだ。
凛ちゃんだけを思つて一生懸命すぎるほど頑張つて、無意識に凛ちゃ
んを追い詰めてしまつた凛ちゃんのお母さんと、どこまでも能天気
な私の母親。凛ちゃんだけ、紫コンパスのおねえさんだつて、う
ちの母親みたいな人の娘だったら、違つてたのかもしれない。そ
うだつたらよかつたのにね。そうでしょ、お母さん。

「えつ、何か言つた？さて、今夜は凛ちゃんと一緒にから揚げだ。」
エプロンで目をおさえながらも、いつもの能天気な声で言つた。

『しょうがないなあ。凛ちゃん、お母さんから揚げ、一緒に食べてつ
てあげてね。』

(指導教諭／柳沼とも子)

『作品の意図』

「トロンプ・リュイ」とは、錯視を利用した絵画のことである。日本語では「だまし絵」などと呼ばれる。老婦人の顔と貴婦人の顔が一つの絵画に見えるものが有名である。二つともが見える人と、どうしても片方しか見えない人とがあり、見えないほうが見えるようなると少し驚いたりもする。

自分の目に映るものがすべての人と同じように見えているとは限らない。たった一つの出来事や対象でも、複数の意味を持つのが通常である。そしてその意味は対象そのものが有しているのではなく、対象を認識する私たち自身にゆだねられている。自分自身を、そして周囲を幸福にするのも不幸にするのもこのとらえ方の幅の広さであると考える。

隠された意図を、できるだけ柔軟に、できるだけ多様にとらえていくことができる大人になつていきたいと私は願う。

『作品の寸評』

主人公の緑は母親や先生といった周囲の大人に対して、批判的で皮肉な態度で觀ているが、自分はそれが反抗期であるとは気づかず、友人の夢野を自分よりも幼い「中二病」だと思っている。しかし、凛という友達の境遇を知つていく過程で、彼女の苦悩や葛藤を知り、自分と比較しながら緑自身の立場も客観的に見られるようになる。

この作品においては友達の凛の存在が大きい。主人公の緑よりも大人びた存在として描かれるが、実は母親からネグレクトに近い扱いを受け、将来も自分では選べない境遇が描かれる。自分を守る手段としてなかなかその境遇から抜け出したかったからなのか、凛には大きな秘密があつた。緑は凛のことを知るたびに考えさせられる。

この小説の描き方は、作者が登場人物に同化するというより、小説の外からしかも高い視座から、登場人物に巧みに語らせて いる印象をうける。そこに作者の仕掛けの巧妙さがある。

『トロンプ・リュイ』（錯覚を利用した絵画・だまし絵）という題名も、表面的な見方ではなく、多面的に客観的に物事を見極めたいという作者の意図が伺える。

（審査員／三 輪 晶子）